

中学 1 年 国語科 教材別テスト⑫ 模範解答・解説

中学 1 年 国語 / 「少年の日の思い出」(ヘルマン・ヘッセ) / 光村図書『国語 1』

【このテストの使い方】

本文は載せていません。教科書『国語 1』の「少年の日の思い出」のページを開いたまま解答します。この作品は、現在の場面のあとに「客」が少年時代を語り出す入れ子（枠物語）の形で書かれています。登場人物の行動から心の動きを読み取る練習に向いた教材なので、記述問題と、心情の流れをたどる選択問題を中心に組みました。

配点一覧

観点	大問	内容	配点
知識・技能 50点	一	漢字の読み書き（20問／送りがなをふくむ）	1点×20＝20点
	二	語句の知識（慣用句・語の意味・対義語・類義語）	2点×7＝14点
	三	文法（助詞・助動詞のはたらき）	2点×8＝16点
思考・判断・表現 50点	四	「少年の日の思い出」の読解（12問）	50点
合計			100点

【出題のねらい】

- ① 助詞の種類（格助詞・接続助詞・副助詞・終助詞）と助動詞の意味（受け身・自発・推定・様態など）を見分けられるか。
- ② この作品が入れ子（枠物語）の形で、大人になった「客」＝「僕」の回想として語られていることをつかめているか。
- ③ 「僕」のちょう集めへの情熱と、珍しい獲物を得意に思う気持ちを結びつけて説明できるか。
- ④ エーミールの人物像（模範少年・非の打ちどころがない・冷たい批評家的態度）を言葉にできるか。
- ⑤ 盗みの場面の心の動きの順序と、許しも怒りもない対応が「僕」を打ちのめした理由、そして結末でちょうを押しつぶす行為の意味を読み取れるか。

一 漢字の読み書き (1点×20=20点)

番号	解答	番号	解答
①	びみょう	⑪	標本
②	ねっきょう	⑫	努力
③	はんてん	⑬	印象
④	えもの	⑭	実験
⑤	れいたん	⑮	批判
⑥	ゆうわく	⑯	緊張
⑦	つくろう	⑰	盗む
⑧	さまたげる	⑱	許す
⑨	うらやむ	⑲	謝る
⑩	さぐる	⑳	後悔

小計 20点

【注意したい字】

③「斑点」は「はんてん」。「反点」「班点」と書く誤りが多い(「班」は班長の班)。④「獲物」は「かくぶつ」ではなくえもの。⑤「冷淡」の「淡」はさんずい。「炎」の部分「災」などと書かない。⑦⑧⑨⑩は送りがないで必要。⑦「繕う」を「ぜんう」と読む誤りに注意。⑪「標本」の「標」は木へんに「票」。「漂」「標」と混同しない。⑫「努力」の「努」は「奴」＋「力」で、「怒」と書きまちがえない。⑬「印象」の「象」は、動物の「ぞう」の字。⑭「実験」の「験」はうまへん。「検」「険」との混同に注意。⑯「緊張」の「緊」は「臣」「又」「糸」を組み合わせた形。「堅」と混同しない。⑰⑱⑲も送りがないで必要で、「盗む→盗すむ」「許す→許るす」「謝る→謝まる」は×。⑳「後悔」の「悔」はりっしんべん。

二 語句の知識 (2点×7=14点)

番号	解答	解説
(1)	ア	「非の打ちどころがない」＝欠点が一つもなく完全である。エーミールの人物像を表すときに使われる言い方。「非」は「あやまち・欠点」の意味。
(2)	イ	「息をのむ」＝おどろきや感動で、はっと息を止める。美しいちょうを目にした場面の心の動きに重なる表現。アは「息が切れる」。
(3)	イ	「～に目がない」＝大好きで夢中になる。例「あまい物に目がない」。「目がない」＝見る力がない、ではない。
(4)	イ	「丹念」＝心をこめてていねいに。「丹念に調べる」「丹念に仕上げる」。反対はア「ぞんざい・手早く」。
(5)	反対	賛成 ⇄ 反対。「否定」「拒否」も意味は近いが、漢字二字の対義語としては「反対」が正答。
(6)	ア	「模範」＝見習うべき手本。イ「模型」は字が似ているだけで意味がちがう。「模範生」は「手本になる生徒」。
(7)	ア	「口をつぐむ」＝口を閉じて何も言わない。イ「口がうまい」＝話が上手、ウ「口をはさむ」＝横から話に加わる、エ「口が軽い」＝秘密を言ってしまう。

小計 14点

三 助詞・助動詞のはたらき (2点×8=16点)

番号	——線部	解答	解説(見分け方)
(1)	を	格助詞	主に体言につき、あとの語との関係(ここでは対象)を示す。「が・の・を・に・へ・と・より・から・で・や」の十語。
(2)	が	接続助詞	活用する語(用言)のあとについて、前後を逆接でつなぐ。同じ「が」でも、「風がふく」のように主語を示す「が」は格助詞なので注意。
(3)	まで	副助詞	いろいろな語につき、意味をそえる(ここでは「～さえも」という強調)。「は・も・こそ・さえ・だけ・ばかり・まで・しか」など。
(4)	よ	終助詞	文末につき、気持ちや態度(念おし・呼びかけ・疑問など)を表す。「か・な・ね・よ・ぞ・さ・わ」など。
(5)	れる	受け身	「～に…される」の形。動作をする相手(妹に)が示せるかどうかが決める手。
(6)	れる	自発	「自然に～される」の意味。「自然に」「ひとりで」を補えるかで判断する。思い出す・感じる・しのばれるなど、心の働きを表す語につきやすい。
(7)	らしい	推定	何かの根拠をもとに推し量る。「どうやら」を補える。人から聞いた話なら「～そうだ(伝聞)」になる。

(8)	そうだ	様態	「今にも～しそうだ」と見た様子から判断する用法。動詞の連用形につくのが様態、言い切りの形（終止形）につくのが伝聞（例「降るそうだ」）。
-----	-----	----	---

小計 16点 / 知識・技能 合計 50点

【助詞・助動詞を見分けるコツ】

① 助詞は活用しない付属語、助動詞は活用する付属語。まずここで分ける。② 同じ「が」でも、体言につけば格助詞／用言につけば接続助詞。③ 「れる・られる」は受け身・自発・可能・尊敬の四つ。「～に」が補えれば受け身、「自然に」が補えれば自発、「～できる」に言いかえられれば可能、えらい人の動作なら尊敬。④ 「そうだ」は直前の形で決まる（連用形＝様態／終止形＝伝聞）。

四 「少年の日の思い出」の読解（50点）

番号	解答	解説・採点のポイント
(1) 4 点	ウ	現在の場面（「私」と「客」）→「客」が語り出す少年時代、という入れ子（枠物語）の構成。物語の中に物語が入っている形。ア「私」が自分の体験を語る、ではない点に注意。
(2) 2 点	イ	後半を語るのは「客」であり、その「客」が少年時代の自分を「僕」と呼んで回想している。語り手が交代することが、この作品の大きな特徴。
(3) 4 点	イ	ちょう集めは「僕」にとって、時間も食事もあるほどの情熱の対象だった。ア「競争心だけ」、ウ「しかたなく」、エ「お金」はいずれも本文と合わない。
(4) 6 点	（例）珍しい青いコムラサキをとらえて、得意な気持ちになったから。（29字）	「珍しい（青い）ちょうをとらえた」（3点）＋「得意になった／自慢しなくなった／見せたくなった」（3点）の二点で採点。 「収集が好きだったから」など情熱の強さだけを書いたものは2点まで。二十五～三十五字から外れたら－1点。
(5) 4 点	イ	エーミールは模範少年として描かれ、非の打ちどころがない。しかもその目は冷たい批評家のように、「僕」の収集を値踏みするように見る。これが後半の対応につながる。
(6) 4 点	ア	「僕」の感情は一方向ではない。みごとな収集を認めて感心する気持ちと、それゆえにねたみ憎む気持ちが同時にある。この相反する感情が読めているかがポイント。
(7) 4 点	イ	「見る→ひかれる→誘惑→実行」という流れ。はじめから盗むつもりだったのではなく、気づかぬうちに手が出てしまうところが、この場面の恐ろしさ。エ「腹が立つ→こわしてやろうと考える」は結末の行為と混同した誤り。

四 「少年の日の思い出」の読解（つづき）

番号	解答	解説・採点のポイント
(8) 6 点	(例) 自分が盗みをしたという罪の意識にたえられなくなったため。(28字)	「盗みをしてしまった」(3点) + 「罪の意識・後ろめたさにたえられない」(3点) の二点で採点。 「見つかるのがこわかったため」だけのものは3点。「ちょうがこわれたため」は因果が逆なので0点。「～ため。」で結んでいないものは－1点。二十五～三十五字から外れたら－1点。
(9) 6 点	(例) 怒られるより、人間として軽蔑されたことがつらかったから。(28字)	「怒りもせず、許しもしなかった」(3点) + 「人間として軽蔑された／見下されたことがつらい」(3点) の二点で採点。 「ひどいことを言われたから」だけのものは2点。しかられるほうがまだ救われたのに、エーミールは「僕」を相手にする価値のない人間として片づけた——ここに気づけているかが分かれ目。二十五～三十五字から外れたら－1点。
(10) 2 点	イ	母は「僕」をののしらず、自分の口であやまりに行かせた。責任は自分で取らせるという対応であり、「僕」を信じて向き合わせる愛情の形。
(11) 4 点	ウ	この作品の主題に関わる問い。一度こわれたものは償えないと知った「僕」は、自分の情熱そのものを自分の手で終わらせる。イ「うさをはらした」のような単純な怒りではなく、自分への罰・訣別であることを押さえる。
(12) 4 点	ア・イ・エ・オ	ウ…エーミールはどならず、冷たく静かに対応したので×。これが最大の引っかけ。 オ…エーミールは「僕」を許さなかった(○)。 ア・イ・エ・オの四つそろって4点(完答)。一つでも足りない、または余分な記号があれば0点。

思考・判断・表現 合計 50点 / 総合 100点

【この教材で落としやすいポイント（8つ）】

1. この作品は入れ子（枠物語）。前半の語り手「私」と、後半の語り手「客」＝「僕」を混同しないこと。
2. 「客」は大人になった人物であり、少年時代の自分をふり返って語っている。「僕」は回想の中の自分。
3. 「僕」の情熱は本物だが、同時にエーミールの評価に敏感だった（感心しつつ、ねたんで憎んでいた）。この二面性が後の行動の伏線になる。
4. エーミールは意地悪な少年ではなく、非の打ちどころのない模範少年。だからこそ「僕」にとってやりにくい相手になる。
5. 盗む場面は計画的な悪事ではない。「見る→ひかれる→誘惑→実行→罪の意識」という流れを順にたどること。
6. ちょうの羽がつぶれたのは、あわてて隠したことによる偶然。わざとこわしたのではない。
7. エーミールの対応は「怒らない・許さない・軽蔑する」の三点セット。怒られなかったことがかえって「僕」を追いつめる。最大のポイント。
8. 結末の行為はやつあたりではなく、自分への罰と、ちょう集めへの訣別。気持ちを問う記述では、行動をなぞるだけでは0点。「～という気持ち。」「～ため。」の形で結ぶこと。

